（３）②様式第３号－２（報告書）

NITS・教職大学院・教育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 秋田大学教職大学院 男鹿市教育委員会・秋田県立男鹿海洋高等学校
	事業名：【NITS・秋田大学教職大学院コラボ研修】 ふるさと教育実地研修「地域の教育長が語る『我がまちの教育』2024～男鹿市～」 ～小学校・中学校・高等学校・企業等の訪問と対話を通して秋田の教育の未来像に迫る～
	研修等名：【NITS・秋田大学教職大学院コラボ研修】 ふるさと教育実地研修「地域の教育長が語る『我がまちの教育』2024～男鹿市～」 ～小学校・中学校・高等学校・企業等の訪問と対話を通して秋田の教育の未来像に迫る～
	開催日時：令和６年９月２６日～２７日　９時～１７時 開催場所：男鹿市立船川第一小学校、男鹿南中学校、秋田県立男鹿海洋高等学校、風と海の学校、他 参加人数（総数）と参加者の属性：39 人　教職大学院生 32 人（内現職教員 11 人）、大学教員 7 人

目的：

・男鹿市では、「なまはげの里フィロソフィー～すばらしい人生を送るために～」を掲げ、児童生徒に男鹿市民としての誇りと自信をもたせるためのふるさと教育を推進している。男鹿市教育長の講話と対話を通して、フィロソフィー設定の経緯と域内小・中学校の学校経営とのつながりを意識した教育施策について学ぶとともに、実際に学校訪問を通して男鹿市が抱える課題を見つけ、共有して解決のための提案を試みる。

・船川第一小学校の県内トップレベルにある ICT 教育や男鹿南中学校の地域密着型のふるさとキャリア教育の特色を学び、将来の秋田の教育について各自の考えを深化させる。また、男鹿海洋高等学校の専門学科（海洋科、食品科学科）の実習の参観を通して生徒のキャリア形成について新たな気付きが得られるようにしたい。さらに、男鹿水族館や洋上風力発電関連企業との連携など産官学民がどのようにつながり、海洋人材開発へ向けた取組を行っているかを考察し、新たな子供観・学習観・学校観をもつことにより、各自がより深く省察して豊かな教育実践へ結びつける。

内容：

第１日（26 日）
① 秋田県立男鹿海洋高等学校（海洋科、食品科学科の授業参観、経営説明）
② 「風と海の学校」（講話、プール訓練施設見学、シミュレータ操船体験）
③ 男鹿水族館（営業担当者から校外学習、教育旅行の企画立案に関する講話、誘客、営業の説明）

第２日（27 日）
① 船川第一小学校（授業参観、学校経営説明、ＩＣＴを効果的に活用した学習過程に関する説明）
② 男鹿南中学校（授業参観、学校経営説明、ふるさとキャリア教育における生徒の地域貢献の説明）
③ 男鹿市教育委員会（教育長による行政説明、学校教育課長による男鹿市の教育施策の説明）

○男鹿海洋高等学校では、専門学科（海洋科、食品科学科）の特色について学科主任から説明があった。ロープワークのロープをワイヤーへ発展させたり、操船実習やエンジン実習を通して、１級小型船舶免許の取得を目指している。年々漁獲量が上昇しているサワラやシイラを使った商品開発をしている。

○男鹿市教育長から域内の校長に対してどのような学校経営を期待しているかの話があった。学校経営において何も変えないことは後進しているという意識が必要。「工程管理」と「品質管理」に通じるところがある。地域の特色を生かしたカリキュラムの編成と探究活動の充実、地域企業や事業所との一層の連携といった活動をもとに、子どもと地域が関わり合いながらキャリア形成をすることが大切である。

成果：

・男鹿海洋は、秋田県唯一の水産高校として地域密着型の教育活動を通じて、地域の課題解決や産業理解を深める重要性を強調されていた。食品開発や風力発電など、地域に根ざした実践的な教育が行われており、風と海の学校と同様に地域の協力が欠かせないと感じた。（学部卒院生Ａ）

・大学院の講義でも「秋田の探究型授業」や「地域に根ざしたキャリア教育」について学修するが、今回の実地研修は、地域や子どもの実態に応じて、どう運用されているのかを学ぶ貴重な機会となった。（学部卒院生Ｂ）

・地域課題を市、学校、企業等が共有し、それぞれの立場で同じ方向を向きながら連携協働して課題解決に取り組んでいる点が強烈に印象に残った。特に中学校では、生徒が地域課題である「空き家」の活用法について、主体的に調べ議論していた。それを本気になって評価する地域の方がいることで、核心に迫る深い学びへと進んでいくと感じた。（現職院生Ｃ）

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

・研修参加者へは男鹿市内の各箇所の訪問目的は書面及び口頭で伝えていたが、一番のねらいは男鹿の子どもたちへの愛が男鹿市で暮らす全ての人々の通奏低音であることを感じてほしいことであった。それは訪問箇所を重ねないと参加者の心に響かないと思っていた。研修担当者の考えは、学校も教育委員会も民間企業も男鹿の子どもたちを中心につながり、顔の見える連携をしていることに気付き、最終日の男鹿市教育長の講話でその思いに腹落ちするというものであった。ところが、研修者の中には、すでに１日目の省察で、「市教委や学校、民間企業が共有し、子どもを真ん中にして分厚い連携を行っていることが立体映像として理解できたように思います。まさに立体曼荼羅です。」とあった。参加者のわくわくする気持ちが伝わった。他の研修者も同様の省察であったなら、更に探究を深めるために参加者の感想を生かして、例えば「男鹿市はこんなに分厚い連携ができるのはなぜか」を１日目の終わりに問いかけ、翌日のグループ対話につなげるようにしてもよかったのかもしれない。
・２日目の男鹿市教育長の講話の後、質問から問いへと流れた。参加者から教育長に対して、「１０年前の教育ビションはどのようなものであったのか。そのビジョンと現在の状況を比較検証しているのか」という問いがあり、熱を帯びた対話が展開された。全体を通して担当者のあせりから早い段階で男鹿市の教育課題に焦点化して探究を方向付けたことを反省している。地域のリソースを整理し、地域の魅力を十分認識させてからグループ対話に入ると参加者一人一人にもっと豊かな気付きが生み出されたと思える。問いを立てることの難しさを改めて学んだ。

アイディアや工夫したこと：

① 研修における「探究や協働の過程」には実体験が欠かせない。本研修にしか得られない体験機会を提供。

【男鹿海洋高等学校でのロープワーク・調理実習】

【風と海の学校でのシミュレータ操船体験】

② ふるさと教育における学校と企業・地域の連携の内容を知り、リアルタイムで比較検討できる機会を提供。

【プール訓練施設での説明】

【男鹿水族館営業担当者からの説明】

【男鹿南中学校ふるさと教育の説明】

③ 男鹿市教育長からの講話からグループ対話（男鹿の教育課題の解決へ向けて）を採り入れ自分事へ

【船川第一小学校授業参観】

【男鹿市教育長のふるさと教育講話】

【グループによる対話】